なしの評価者」であったかを痛感することともなった。

２－３　評価の体系

○実証目的の評価

本調査で実施したプロジェクトは飽くまでも実証事業である。つまり、調査団に取っては、プロジェクト本来の目的（プロジェクト目標）を達成することが目的ではなく、実証が目的であった。勿論、受益者である農民にとっては、実証事業もプロジェクトもなく、本来の目的を達成することを目指していた訳であるが、調査団には他の目的もあったと言うべきであろう。では、それは何であるのか？　実は全ての実証事業について、その実証目的が最初から明確な訳ではなかった。ただわかっていたのは、社会開発に関わる実証事業を行っている限り、実験のようなことはできないということ、つまりプロジェクト目標が達成できるかどうかを実証するというような形の実証事業は許されないということであった。そして、実証事業を実施しながら得た結論が、上述の「「いかに（HOW）」実施するか、「どういう条件で（LIMIT）」実施できるかだったのである。例えば、ある事業を持続的に実施できるようにする、つまり外からのインプットは最低限にして参加型で実施するためにはどのような仕組みが可能か、また定着農業をやっている農民には簡単にできることが、遊牧系の人たちにはできるのかどうか、できないとすればなぜか、というようなことが実証の目的となった。

○社会開発の評価

また、もう一つの観点は社会開発、言い換えれば内発的発展そのものにあった。社会開発というのは、決して道路、廃棄物処理、上下水道というような縦割りのセクターではなく、社会の開発（発展）そのものである。とすると、社会開発プロジェクトの目的も、決して移動が便利になること、安全な水が飲めるようになることだけではなく、人々が元気になること、組織に力がつくこと、開発のモーメンタムがつくことというようなことにあるはずである。つまり、ほとんどの社会開発プロジェクトの場合、プロジェクトそのものの目標と、社会開発の視点からの目的は異なるということである。とすれば、プロジェクトの目標群を使った客観的な評価だけではなく、人、組織、コミュニティーの視点からの社会開発の評価が必要であろう。（これについては、気がつくのが遅すぎたこともあり、十分な評価ができなかった。）

○プロセスの評価

さらに、受益者・実施者がもっと学べる評価をという課題があった。受益者・実施者に対するフィードバックという観点からは、プロジェクトの結果という時間的にも空間的にも限定された評価よりも、実施プロセスにおける継続的な評価が重要になるであろう。外部からのインプットを使ったプロジェクトの期間中だけ何かが変わった、何かが達成されたということではなく、住民主体の開発プロセスへの持続的なインパクトが期待されるからである。そこで、本調査では「結果」の評価だけではなく、「プロセス」の評価を試行した。具体的には、プロジェクト実施中に起こった問題に対して、誰がどのように対応したか、あるいはどのように対応すればよいかをワークショップで議論し、実施に関わる全てのステークホルダーが、今後同じような問題が起こらないようにする、あるいは起こった時にはどう対応するかを学ぶプロセスとした。

○結果の評価

なお、本調査でも「結果」を評価するためのプロジェクト・デザイン・マトリックス（PDM、別名ログフレームまたはロジカル・フレームワークなど）を作成しており、指標も定めているが、この指標は必ずしも第三者にも理解できる客観的指標とはなっていない。ログフレーム、指標による評価自体を、コミュニティー・行政・調査団が参加したワークショップによる相互評価、参加型評価で行っているからである。

また、「結果」の評価では、プロジェクト目標そのものよりも、インパクトに当たる部分を重視した。プロジェクトの実施によって、プロ

ジェクトに参加した人・組織・コミュニティーに力がついたことを「縦のアウトカム」、周辺の人・組織・コミュニティーに与えたインパクトを「横（水平）のアウトカム」と呼んで、それぞれ整理した。

２－４　拡大モニタリング・ツアー

コミュニティー・ベースの参加型のプロジェクトを実施し、参加型でモニタリング・評価を行うためには、計画段階から参加型の取り組みを行い、参加の度合いを高めて行くことが必要になる。本来、主体は住民であり、住民だけではどうしても足りないところ、どうしてもお手伝いが必要なところにのみ調査団は登場すべきなのであろうが、現実にはなかなかそうはいかない。主役が住民であることは間違いないにせよ、住民が主体的に動いてくれるようなきっかけ、仕組みはやはり調査団が作って行かざるを得ないというのが実態である。勿論、呼ばれた時だけ行けば良い、あるいはじっくり時間を掛けて機が熟してから登場すれば良いという考えもあるであろう。と言うよりも、その方が正論であろう。しかしながら、ＯＤＡという枠組みで、またプロジェクトという時間も資源も限られたアプローチをしている限り、なかなかそこを突破できないでいる。どうしても、調査団の方から仕掛けざるを得ないのである。

この調査では、拡大モニタリング・ツアー（Inter-location monitoring tours）と称して、実証事業を実施している地区の村人同士が相互に、また実証事業の対象とならなかった地区の村人が実証事業を訪問してモニタリング・評価する試みを行っている。実証事業を実施している人たちが自分たちの事業を説明しているのを聞いていると、事業に対する誇りと自信が感じられるし、一方訪問した人たちには自分たちにもできるのではないか、やってみようという気持ちが芽生えているのが感じられる。

つまり、このツアーには、参加型でかつ客観的なモニタリング・評価を行うという目的と同時に、実証事業から学ぶスタディ・ツアーという目的がある。実証事業を点から面へ展開して行くためのツールともなることが期待されているのである。そして、そのためには、地域内である程度の数の実証事業を同時に実施して行くことが必要だろうと考えている。また、村からほとんど出たことのない人が多い情況では、お互いに顔見知りになるということが、部族間の衝突を減らすためにも有効なのではないかという期待もあった。

このような参加型モニタリング・評価、拡大モニタリング・ツアーの効果について評価するのはまだ早すぎるかも知れない。けれども、例えば実証事業として導入した改良かまどは、予想以上のスピード、範囲で対象地域内に広がっており、特に、行政の手助けを待たずに、自ら改良かまどを作り始めた女性たちがたくさんいたことは注目に値する。また天水農業の改善事業は、拡大モニタリング・ツアーで実際に畑を見に来た農民たちの間から、積極的にやりたいというグループが出てきて、二つの地区で第二世代の事業が始まった。この第二世代の実証事業は、第一世代に比べて工事の進捗、意思決定などが早く、大きな成果をあげている。さらに、井戸の建設に関しても、無償資金協力（ただし地元の負担が80,000シリング）で対象地域内に作られた井戸を見た他の集落から、同じような井戸を掘ってほしいという要請があった。驚いたのは、彼らが事前に80,000シリングを集めてしまったことで、外部からの働きかけによって井戸を掘った集落では、事前に集まったところが皆無（集まっても4割程度）だったことを考えると、極めて対照的である。残念なことに、地下水探査の結果、その集落には井戸が掘れないことがわかったが、外部からの働きかけのやり方、彼らの内発的発展に対する意識、そしてプロジェクトに対するオーナーシップによって、どれだけプロジェクトに対する取り組みが異なるかということを、痛感させられる経験であった。

２－５　おわりに

以上から、参加型の計画だけではなく、参加型のモニタリング・評価が重要であること、それがプロジェクトのオーナーシップを高めることに確信を持つようになった。さらに、プロジェクトそのものを目的にするのではなく、プロジェクトを道具として社会開発を目指すこと、そのためにはプロジェクトそのものにこだわるのではなく、第一世代のプロジ

ェクトをエントリー・ポイントとして、面的な展開、持続的な開発を目指すようなアプローチが必要なのではないかと考えている。本調査では、ロバート・チェンバースの言葉を借り、このようなアプローチを「バスケット・オブ・チョイシズ」と呼んでいる。

当事者の対応案を尊重する参加型評価

平山恵

1．当事者の参加

1－1　評価活動の流れ

評価はプロジェクトサイクルの流れの中にあり、評価が行われた後には、評価での提言や教訓が当該プロジェクトまたは他のプロジェクトの計画、実施につながっていかなければ意味がない。昨今、評価の重要性は認識され、評価活動も年々増えている。にもかかわらず、評価活動が提言、教訓の報告で終わっているのはなぜだろう。評価の目的の認識が低いためではないだろうか。

1－2　当事者とは誰か

評価は「客観性」を担保するために「一般的には立案者と実施者とは立場の異なる第三者によって評価が行われる」とPCM手法のテキストにある。また、「評価の目的によっては、受益者の意見を評価に十分反映させる必要があるので、受益者等関係者の評価への参加も検討すべきです」とある。「受益者の意見を反映させる」ことが評価結果を導き出すデータとしての役割で終わっていては評価の目的である「改善」は果たせない。関係者が改善活動を行うときに拠所となるのが評価より導き出された提言であり教訓であるはずだ。つまり「学び」が改善への次の「活動」の一歩につながっていないと評価は生きてこない。

改善活動の主体は誰か。やはり当事者であろう。ところで、この「当事者」とは誰のことか。プロジェクトの受益者、実施者、資金提供者が挙げられる。プロジェクトによりマイナスの影響を受ける人も当事者であると言えるかも知れない。なぜならプロジェクトの方向を変えてもらわないと悪い影響を受け続けるからである。当事者は更に関与の程度によりレベルがある。関与の大きさが大きいほど、評価結果に耳を傾け、プロジェクトの改善にも大きく関わっていくのである。「これは私の課題」と思えば評価活動にも積極的に参加するであろう。受益者でなくても「これは私の課題」と真剣に思っているのなら当事者になり、評価活動に参加するだろう。その意味で一般に外部者であるとされる「援助する側」も当事者になり得る。

逆に援助者が「主な受益者」と考えているステークホルダーが自分の問題に関与できておらず、他人に自分の問題を託している場合も少なくない。東北地方で訪問聞き取り調査で農家を訪ねたときに多くの女の人たちは「留守です」と答えて、意見を表明しなかった。夫や、息子の意見がその家の意見とされていかたからだ。しかし、調査者側が「お母さんの意見を反映したいのです。少しでも意見を下さい」と促すと、意見が結構ある。「あなたの意見はご主人とは違っても良いのですよ。」と質問者が一言入れると、自身をつけたかのように溢れんばかりに意見が飛び出す。当事者は参加できることが分れば参加するのである。

2．参加型評価のポイント

2－1　評価の目的の認識

関係者によって評価の目的は少しずつ違う。例えば、2国間援助のドナーは資金提供者である自国の国民へお金の使途を明確かする必要があるので、説明責任を評価の目的のひとつにする。透明性を確保しておかないと続いて資金を集められなくなるからだ。しかしプロジェクト自体の改善、今後のプロジェクトのための教訓の蓄積は資金提供者への説明責任よりも大切な目的である。評価の目的が援助者側に大きく傾斜しないように注意する必要がある。そのために評価の活動の最初に関係者皆で「なぜ、評価を行うか」をしっかり確認することが必要だ。この確認をしっかりすることが評価の質のよしあしを決めることにつながる。言い換えれば、「評価結果の利用なし」現象にはならないはずである。評価結果に基づきプロジェクトの活動が改善することなしに評価の目的は果たされないのである。

2－2　迅速・参加型評価としてウォンツ・エイブ

ル

次の活動につなげるための迅速・参加型評価ワークショップにウォンツ・エイブル分析が使える。まず、詳細な目的設定で、「評価ワークショップで何をチェックしたいか」をウォンツ・エイブルシートに書き出す。非識字者がいる時は、書き取りたいが意見を字や絵で書き取る。エイブルには「それをチェックするための手段」を書くのである。

また、受益者のワークショップでは「今気になっていること」や「問題点」を計画時に使った問題系図や目的系図上で指摘してもらう。計画時の系図がない場合には、その場で気になる点と問題点を絵や字で書き取る。その後、グループで問題点を深く探る討論をモデレーターはリードする。その後に問題に対する対応案「エイブル」を書いてもらうのである。

討論をより活発にするために「投票法」のテン・シーズや演劇を取り入れるなど意見が十分出る工夫をする。

２－３．オーナーシップとモニタリングを軸とした評価の持続性

プロジェクトは終わってもそこに住む人々の生活は続く。プロジェクトの効果が持続するためには評価活動が継続されないといけない。評価だけのために資金が潤沢にあるとは考えられないので、お金がかからない日常のモニタリングの積み重ねが必要である。つまり、大規模な評価活動が必要ではなく、毎日、毎週の実施を振り返るという日常のモニタリングの積み重ねがあればプロジェクトの改善は行える。外部者はプロジェクト期間内にモニタリングが根付くような支援をする。そのためにはプロジェクトのオーナーシップがその土地に住みつづける人たちの中に存在する必要性がある。自分の課題だと思わないと人任せになってしまって、モニタリングを形だけで終わらせることなりかねないからである。

３．対応案作成の参加型評価の事例：ガーナ開発支援事業の中間評価

国際協力事業団（JICA）の開発支援事業スキームでガーナの２つのローカルNGOが実施するのプロジェクトの中間評価を行った。

３－１　評価の目的と方針の設定

関係者とWants　Sheetを総合した結果話し合いを持ち以下のように評価の目的を設定した。

（１）　対象NGOが改善点及び教訓を得て、今後の活動に生かせるようになる。

（２）　プロジェクト関係者がモニタリング/評価に参加することでプロジェクト地域の状況を改善し続けるような学習機会を創出する。

プロジェクトの立案に住民が参加した形跡はないので、立案したNGOのあり方が妥当であるかどうかが焦点となった。

３－２　評価の方針

今回の評価のファシリテーターとしての参加型評価の方針と方法は以下のとおりである。

評価方針

（１）　益者を含む多くの関係者が参加して多用な視点で評価する。

（２）　ロジェクトを実施しているローカルNGOが改善点に気づき今後の活動の参考にできるような評価にする。また、今回の参加型評価方法をNGOが参考にして、これから評価活動にとりいれられるような学びの機会（Participatory Learning Action）を創出する。

（３）　ナーに依存することから脱却した将来方向を見据えた活動の次期計画に貢献できるような評価活動にする。

３－３　評価方法

（１）　評価の目的と質問項目を関係者と設定する。評価の目的がドナーのためでなく、プロジェクトの成果をあげるためであることを再確認する。プロジェクトの目標は「女性の収入が向上する」、また上位目標は「女性の生活および地位が向上する」で、プロジェクトの活動内容が多岐にわたっていたために、またプロジェクトが開始されてから１．５年しか経過しておらず効果を計るには難し

いと判断したために、この地点でそれぞれの関係者が何を判断したいか話し合い、今回の評価活動の目標を設定した。その結果

（2） 実施者であるNGO関係者を一人一人個別に（1）で設定した質問を行う。
NGOのスタッフを一人一人別々の部屋に入ってもらい、インタビューする側もスタッフと同じ人数で質問を分担して１０分経つと質問者が同時に次のスタッフに移動して同じ質問を行う。こうすることでスタッフ同士が相談をする時間をつくらず、このNGOの組織力を図った。（Round Interview）

（3） プロジェクト対象地域の住民（受益者・非受益者）参加のワークショップで現状／課題を探る。
「プロジェクト周辺で現在の問題はまたは気になっていることは何ですか？」と言う質問を行い、答えを絵で表現していく。

（4） プロジェクト対象地域の住民（受益者・非受益者）参加のワークショップでそれぞれの参加者自身で（3）で出された課題に対してできること「エイブル」を探る。

（5） ワークショップが終わるたびに、ローカルNGOと評価支援チームで一日の振り返りを行い、何が発見できたかを話し合った。また全ての現地でのワークショップ終了後に全体結果について評価支援チームとNGOのスタッフで話し合い、結論を話しあった。

３－４　住民参加の評価ワークショップ

各２地域合計４地域で２日ずつかけてワークショップを行った。ワークショップの大きな流れは以下の通り。（実際のプログラムは別添１）

（1） 全体セッション「ワークショップの目的」と「評価とは何か」の説明
絵を使ってワークショップの目的が進行しているプロジェクトの「改善」で、ひいては地域の生活の向上であることを説明した。またその改善は住民の積極的な参加なしにはできないことを説明。

（2） グループセッション Part１「何が一番気になっているか」「問題」の話し合い
表明された課題を絵で表現した。

（3） グループセッションPart２「1st テンストーンズ」住民個人個人の最初の投票
（2）で抽出された課題の１０枚前後の絵に対して参加者一人１０個の石でその重要性を投票する。

（4） グループセッションPart3　投票結果を見ながら「何が私たちでできるか」の話し合い
（3）の結果を受けてなぜ票が多く集まった課題は重要なのかを因果関係とそれに対してできることを話し合う。

（5） グループセッション Part４「2nd テンストーンズ」住民個人個人の２回目の投票
（4）の話し合いの終わりに投票することで住民の「エイブル」が表出する。

（6） 全体セッション 各グループの発表と質疑応答
各グループの課題とエイブルの結果を全体のセッションでシェアリングし、対応案を更に検討する。

（7）NGOスタッフとワークショップ・ファシリテーターの振り返りセッション
ワークショップの結果から発見したことを整理する。

３－５　評価を振り返って

受益者が主体的に自分のプロジェクトに積極的に参加してもらうための工夫に力を入れた。住民の参加は単純に人々が参加すれば何かよいことがあるわけではなく、参加に痛みが伴ったり、援助機関への依存を高めてしまう危険がある。予想はしていたが、案の定「エイブル」を話し合いあいはじめると、ドナーを意識した要求が噴出した。たとえば水不足という課題に対して「掘削式の井戸のJICAによる供与」と意見が出る。その際にモデレーターは「JICAができることではなく、あなたたち自身が対応できることを考えてください」と仕切りなおした。この仕切り直しを丁寧に行う。すると、住民参加者が「そ

ういえば、今ある井戸も男達が掘った」と話し出す。また、「籠作りで得た収入を少しずつ貯めて井戸掘り人を雇う」などという意見も出ていた。話し合いを聞いていてどうしても住民でできないものを拾い上げ、この部分に対するローカルNGOができること「エイブル」をNGOスタッフのみで話し合ってもらった。NGOスタッフの間でも住民の要求と同じような援助依存傾向が見られるが、ここも同様に「あなた達NGOスタッフにできることを話し合ってください」とファシリテーションを行った。NGOのスタッフもこちらの意図を掴んで、丁寧に「エイブル」を考えた。更に、政府の担当部門である開発福祉省のNGO担当スタッフに同じ過程を経てもらって、政府として何が出来そうか考えてもらった。

今回は参加者の殆どが非識字者であったため、絵で「問題」や「気になっていること」を絵で描き取り隊が表現し、絵で対応案「エイブル」（私や私たちができること）を多用して考えた。絵の効果は大きく、住民の意見を引き出す良い道具であった。

また、話し合いのトリガーとして投票法「テン・ストーンズ」を使ったのが功を奏して活発な話し合いとなった。テン・ストーンズは2度行った。1度目はそれぞれが出したウォンツに対して投票、2度目はウォンツを達成するための対応案「エイブル」を話し合った後に行った。1度目のウォンツがドナーを意識したものであっても、「エイブル」が自分たちでできることを中心に話し合っているために、2度目の投票の結果は変わることがある。また投票結果が同じように見えても中身をしっかり話し合った上であるので、参加した住民の学びがあった上での同じ結果である。

今回の最大の成果は住民が自分たちで改善する意欲を持ちえたことだ。これが本当のエンパワーメントであろう。二つ目の成果はローカルNGOスタッフの数人が「この評価ワークショップの狙いが良く分った。テン・ストーンズは有効だ。今回のワークショップで学んだので自分達で是非やりたい。」と言い出したことだ。評価ワークショップの最終地では、スタッフが実際にテン・ストーンズを自発的に行っていた。今後のモニタリング・評価の担い手として期待できる。はじめからNGOの育成はこの評価活動の目的のひとつだったので、一日、一日のワークショップの後に時間をたっぷりとってNGOスタッフと振り返りミーティングを行ったことが成功した。

4．おわりに

生活の主体はそこに生きる人々である。よそ者が援助プロジェクトに関わる時に、当事者の関与（committment）を高められる支援ができるかが重要である。モニタリング・評価は主体のあり方、またNGOなどそこに長く関与する２次的主体者のオーナーシップの大きさを確認するものである。助っ人であるよそ者であっても思い入れをもっていないと、真剣に評価には取り組めないのではないか。今後、評価支援者の選考についてもこの点を検討する必要を感じた。

評価ワークショップ本番前のポスト・テストでは絵で表現するだけでなく、劇や「ウォンツ」を表現できるモノを持ってきてもらって象徴することも考えたが、実行に移せなかった。今後、非識字者に対する絵以外の方法も更なる検討を積み重ねたい。

別添１　ガーナNGO、BEWDA評価ワークショップ日程

BEWDA EVALUATION WORKSHOP SCHEDULE

21st January 2002

9:30 - 12:30 Interview BEWDA staff members (8)

Planning of Workshop

13:00 - 15:00 Household visit in Manga to interview few villagers

2 interviews x 5groups

16:30 - Question Review at JICA Liaison Office

22nd January 2002

9:30 - 12:30 Workshop in Woriyanga (JICA ResRep courtesy call to village chief)

Plenary session: Objectives settings

Group work: What kind of BEWDA activities do you join?

What problems do you have concerning your activities?

Each participant express using voice, body, objects.

Lunch

13:30 - 15:00 household visit in Woriyanga to interview few villagers

Household visit in Woriyanga to interview few villagers

2 interviews x 5groups

17:00 - Review/Feedback meeting

Preparation of pictures for Ten Stones (at JICA Liaison office)

23rd January 2002

9:30 - 12:00 Workshop in Woriyanga

9:30 - Discussion "Able""

11:00 - "Ten Stones"& Discussion

11:15 - Presentation on the result of Ten Stones and Discussion

Lunch

13:00 - 15:00 Review/Feedback with BEWDA staff.

17:00 - Preparation for Manga Workshop (at JICA Liaison office)

24th January 2002

Whole day Workshop in whole Manga

9:30 - 13:00

Plenary session: Objectives settings
Group work: What kind of BEWDA activities do you join?
What do you worry most concerning your activities?
Each participant express using voice, body, objects.

Lunch

14:00 - 16:00
Reason to chose& "Able"
"Ten Stones" & Discussion
Presentation on the result of Ten Stones and Discussion
17:30 - Review/Feedback meeting. (at JICA Laiaison office)

<u>25th January 2002</u>

9:00 - 10:00 Review and Feedback about workshop in Manga.
10:00 -Compiling information
13:00 -Review with BEWDA staff (at BEWDA office)
Compiling information

Result of '10 Stones'

Wulugu: 17 Jan 02

represents first 4 choices

	Problem/Important issue	Trust Group 1		Trust Group 2		Trust Group 3		TOTAL		CMA Group 1		CMA Group 2		TOTAL	
		1st	2nd	1st	2nd	1st	2nd	1st	2nd	1st	2nd	1st	2nd	1st	2nd
		8 p		8 p		8 p		24 p		9 p		7 p		16 p	
1	Water supply	14	12	16	18	20	13	50	43	13	15	18	14	31	29
2	Light (Power supply)	13	12	13	20	16	13	42	45	8	9	12	10	20	19
3	Marketing	18	12	9	12	13	16	40	40	7	20	7	10	14	30
4	Numeracy education	0	4	5	5	2	6	7	15	5	2	7	3	12	5
5	Machine maintenance	12	14	6	6	14	14	32	34	7	2	6	0	13	2
6	Transport of nuts/butter	4	4	15	8	3	4	22	16	9	12	8	15	17	27
7	Fuel (diesel) for machine	0	3	2	1	0	4	2	8	5	3	3	3	8	6
8	Containers for butter/ water	6	4	4	2	3	4	13	10	7	0	5	1	12	1
9	Opportunity for trainings	0	7	2	2	0	3	2	12	6	1	7	5	13	6
10	Rice mill machine	3	6	1	5	0	5	4	16	11	15	11	16	22	31
11	Price of input (nuts, firewood)	0	2	7	2	7	4	14	8	3	1	6	3	9	4
	Total no of stones	80	83	80	81	80	80	240	244	81	80	90	90	171	170

Result of '10 Stones'

Wulugu: 17 Jan 02

represents first 4 choices

	Problem/Important issue	Non-CMA 1		Non-CMA 2		TOTAL		* Non-CMA 3
		1st	2nd	1st	2nd	1st	2nd	1st
		10 p		10 p		20 p		14 p
1	Water supply	30	30	35	35	65	65	45
2	Light (Power supply)	26	12	31	19	57	31	19
3	Marketing	19	8	19	8	38	16	15
4	Numeracy education	2	3	0	9	2	12	
5	Machine maintenance	4	6	8	7	12	13	
6	Transport of nuts/butter	19	4	19	6	38	10	17
7	Fuel (diesel) for machine	3	4	0	13	3	16	
8	Containers for butter/ water	1	3	0	3	1	6	
9	Opportunity for trainings	1	2	2	3	3	5	
10	Rice mill machine	5	11	0	9	5	20	
11	Price of input (nuts, firewood)	2	11	4	13	6	24	
	Total no of stones	99	100	98	99	197	199	96

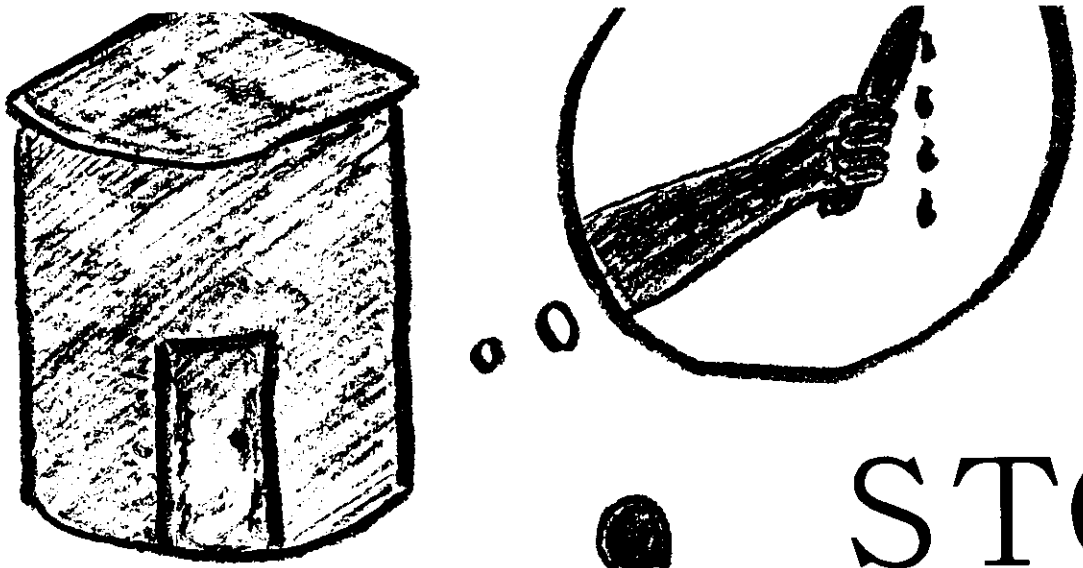
* Non-CMA 3 did not participate in the previous day's discussion.

ガーナでの中間評価ワークショップ
2002年
1月

➡「ウォンツ」に石で投票
『テン・ストーンズ』

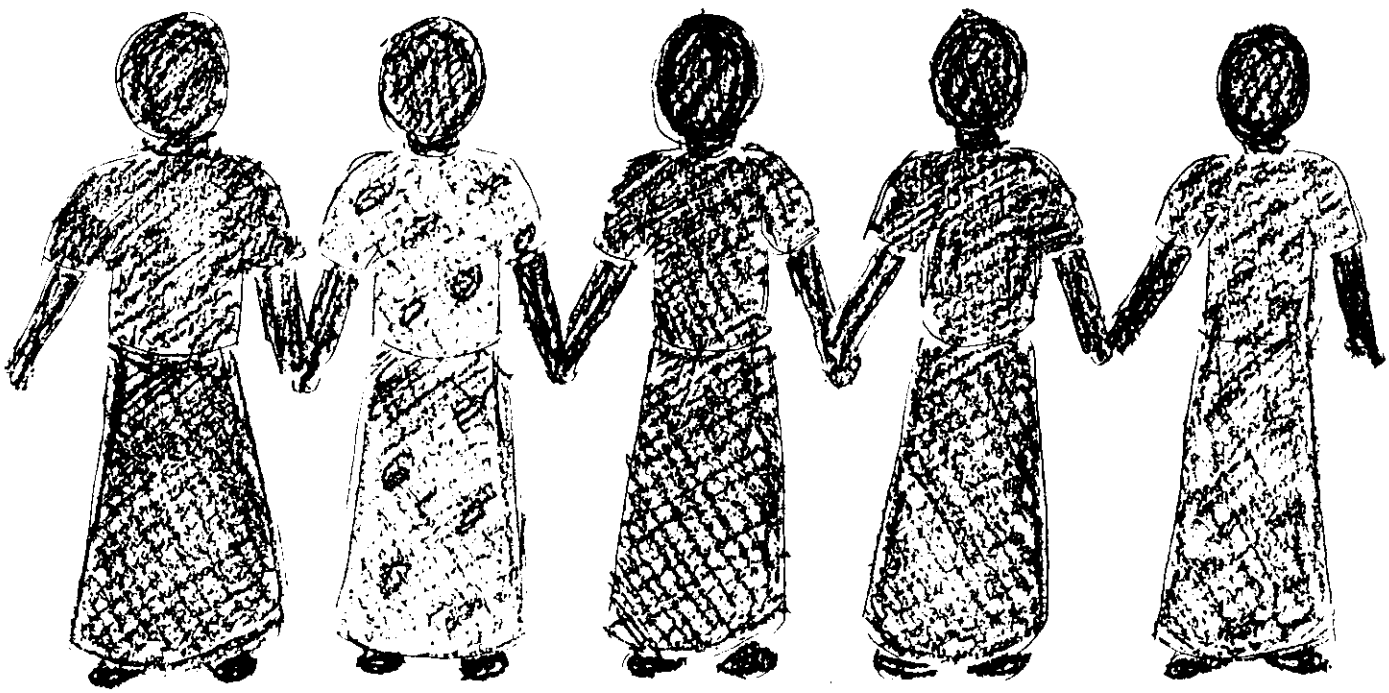
グループ・ディスカッションの発表➡
『衆目評価』

絵による「ウォンツ」の例



STOP

女性割礼の廃止



女性間でもっと団結を

別紙6
研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書　籍　名	出版社名	出版地	出版年	ページ
三好知明	技術協力プロジェクトのモニタリングと評価	国立国際医療センター編	国際保健医療協力ハンドブック	国際開発ジャーナル	東京	2001	52-64
三好知明, 秋山稔	病院協力プロジェクト概論	国立国際医療センター編	国際保健医療協力ハンドブック	国際開発ジャーナル	東京	2001	83-89
三好知明	ボリビア・サンタクルス総合病院プロジェクト	国立国際医療センター編	国際保健医療協力ハンドブック	国際開発ジャーナル	東京	2001	89-99
三好知明	開発途上国で求められる理想的な病院協力への模索—協力の妥当性と多面的機能強化への支援	国立国際医療センター編	国際保健医療協力ハンドブック	国際開発ジャーナル	東京	2001	106-111

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
明石秀親，三好知明，平林国彦，金川修造，實吉佐知子，千葉靖男	開発途上国における医療施設のアセスメントに関する一考察	国際協力研究			投稿中
石田健一ほか：	参加型計画手法を用いた沿岸資源管理とCapacity Development	日本土木学会海洋開発論文集	第17巻	487-492	2001年
Ishida Kencihi, et al	Fishery and its implication to mangrove reforestation project in the southern Thailand	Fisheries Science, (special edition) (in printing.)	68		To be published July 2002
Mitsuo Sakai and Kenichi Ishida	A Case Study on Evaluation of the Salmon Ranching Project of JICA in Chile	Fisheries Science, (special edition) (in printing.)	68		To be published July 2002